

人種問題に関するWilliam Faulknerの発言をめぐって

TAMURA, Rika / 田村, 理香

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

137

(発行年 / Year)

2015-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010620>

法政大学「多摩論集」第31号
2015年3月

人種問題に関するWilliam Faulknerの 発言をめぐって

田 村 理 香

人種問題に関するWilliam Faulknerの 発言をめぐって

田 村 理 香

1950年代は公民権運動が本格化していった時代であった。多くの反人種差別運動家が、また、白人至上主義者たちが意見を述べていた。William Faulknerも人種問題に関する発言を行った一人である。ただし彼の立場はわかりやすいものではなかった。Faulknerは人種隔離に反対していたが、漸進的な撤廃を主張していたため、南部の白人保守派だけではなく、白人リベラルや公民権運動の団体からの批判も招いた。また、黒人を高みから見下していると理解されるようなエッセイ¹や、ミシシッピの州権を黒人の人権に優先させるような発言²は、黒人からの反発も引き起こした。

こうしたFaulknerのいささかわかりにくい姿勢は、彼の出自に帰せられることが多かった。Faulknerは南部白人男性であり、その限界を超えることができなかったというものである。しかしFaulknerは、南部白人男性であると同時に作家でもある。それも、生まれ住んできたミシシッピ州のラファイエット郡をモデルにしたヨクナパトーフアを舞台に多くの小説を書き、南部の抱える人種の問題をだれよりも深く考えてきた作家である。そうした作家としての活動が、人種問題に関する発言に影響しなかったはずはない。本稿では、Faulknerの人種問題に関する発言を作品を通して考察し、それが激動の時代にいかに変化していったかを考えてみたい。

I.

人種問題に関するFaulknerの1950年代の最初の発言は、Leon Turner事件の裁判の判決に対するものであるが、ここには、この問題に対する彼の基本的な姿勢

があらわれている。Leon Turner 事件は1950年1月、ミシシッピ州の拘置所を逃亡した白人男性3人が、黒人の子ども3人を殺害した事件である。³ 当時のミシシッピ州では、殺人罪には死刑か終身刑が適用されていたため、この裁判は、黒人の殺害により白人に死刑判決が下る初のケースになるかもしれないと多くの注目を集めた。が、結局、一人に10年の懲役が、主犯のLeon Turnerともう一人に終身刑が宣告されるのみにとどまった。

この結果についてFaulknerは、われわれミシシッピ人は「悲しみと恥辱」を感じるべきであると述べている (*ESPL*, 203-04)⁴。一つは、被告が黒人であるために公正な判決が下されなかったことに対して、もう一つは、不公平な裁判が、南部人でない人間が南部に口出しする口実となってしまったことに対してである。個人の平等を尊重する姿勢と南部人特有の排他主義がないまぜになっているのである。

Faulknerの個を尊重する姿勢は一貫しており、その後も変わることはなかった。たとえば、1954年のブラウン判決に言及して、人は教育を受ける機会を平等に与えられなければならないと述べているし (*ESPL*, 220-221)⁵ 1955年の娘Jillの高校の卒業式でも「人間を救えるのは人間の集団ではなく、人間という一個の存在である」と話している (*ESPL*, 123)。⁶ 1960年にも、黒人召使に宛てて、「わが社会で黒人に人間としての平等と正義を与えられれば、ほとんどの黒人の状況は変わる」と書いている (*SLWF*, 444)。⁷ 人種を超えて個人の自由や平等の機会を尊重しているのである。

このようなFaulknerの姿勢は、どのように育まれたのであろうか。生まれや育ちだけを考えれば、Faulknerはジム・クロウ的な考えを持っていたとしても一向に不思議ではない。Faulknerは深南部ミシシッピ州の典型的な白人家庭に生まれ育った。Faulkner家は南北戦争以前には奴隷を所有していたし、祖父は、父方も母方も、黒人女性との間に影の家族を持っていた。Faulknerは、黒人の乳母に育てられ、成長期に南部社会における人種の意味を知り、その大切な「母」を失うという南部白人の子どもならではの経験もしている。Faulknerは、彼を非難したり攻撃したり脅迫したりした白人至上主義者の一人になってもおかしくはなかった。実際、同じように育った弟のJohnは、白人と黒人の共学を支持する兄Williamを批判する手紙を匿名で*Commercial Appeal*紙に送っている。⁸

典型的な南部白人男性である Faulkner が個人の自由や平等を尊重するようになった大きな理由の一つに、小説を書いていることが挙げられるだろう。Noel Polk は、Faulkner が実人生でも小説でも、「個々の人間に目を向けている」と指摘し、黒人登場人物が力強く描かれている理由の一つに、「感傷的に描いたり、単純化をしない」ことを挙げている (237)。人種はしばしば Faulkner の登場人物の生き方に深く影響を与えているが、彼らが白人性や黒人性やインディアン性といった全体を象徴する存在として描かれることはない——たとえば “Red Leaves” の Three Basket や “That Evening Sun” の Nancy は、それぞれインディアンであり、黒人であるが、それ以上に個性あふれる一人の人間である。

個の尊重は、Faulkner 自身の生き方にもみられる。1956 年のエッセイ「北部への手紙」では、「個人として独立した存在で自らの意見を述べる」と宣言している (ESPL, 87)。中庸な立場にいれば、「待ってください。…まずはよく考えてみて下さい」と言えるからだという (ESPL, 87)。どこにも属することなく独立して超然としていることは、物語を紡ぐ作家の姿勢とも重なる。

II.

Faulkner の人種問題に関する発言のもう一つの特徴である、北部に対する厳しい見方もまた、南部を舞台に小説を書くことで研ぎ澄まされたと思われる。南部は、南北戦争に敗れたことで、「失われた大義」(Lost Cause) を美化する、いわば神話を作り上げてきた。敗北の神話は、南部人の精神的支柱となって生活のさまざまな部分に浸透していき、南部というものを定義づけることとなった。Faulkner が、人種問題に北部というファクターを持ち込むのは、南部を南部たらしめているのが北部だからであり、彼はそれについても小説で考えている。

たとえば “Rose for Emily” (1930) で、南部淑女として誇り高く生きを求める Emily は、北部人の Homer Barron と交際するが、彼を毒殺する。それどころか、死体を自宅の自分のベッドに横たえ続け、その死体を抱いて毎夜眠る。やがて死体はミイラ化するが、Emily は死ぬまでそれをやめようとしない。腐臭を発しても、ひからびても、存在させ続ける。なぜなら Emily は

そのひからびた屍と永遠にしとねを共にしたいからだ。それが彼女の生きた証しであるからだ。Emily の Homer Barron に対するこの振る舞いを、南部の北部に対する屈折した思いと重ね合わせて見ることは可能であろう。つまり、南部は北部を抱え込んだまま存在している。どんなに年月を経ても、どんなに実態からかけ離れたものになろうと、社会の奥底に抱え込み続け、北部とともに生き続けるのだ。なぜなら、南部を南部たらしめているのは戦争の敗北の記憶であり、それをもたらししたのは北部だからだ。南部は北部を憎んでいる。けれども北部なしでは存在しえない。こうした逆説を Faulkner は書くことで再確認したはずである。

Light in August (1932) の Joe Christmas と Joanna Burden の関係も南部と北部のメタファーと見るができる。自分が黒人なのか白人なのかを決して知ることのできない Christmas は、アイデンティティを模索する中で、だれよりも南部白人男性的なイデオロギーを獲得していった人物である。カーペットバガーの娘である Joanna の、北部人に対する南部人の認識は明確である：「この人たちはわたしたちを憎んでいたのよ。わたしたちは、北部人だから。外国人だから。外国人よりも悪いわね。敵だから。カーペットバガーなんですもの」(249)。それぞれ南部と北部の価値観に人生を囚われている二人は、「原則に則った男同士の戦い」のようなセックスを通じて (235)、「いつになったら人は人種の違う人と憎み合うことをやめるのだろう」と話し合うほど心を通わせていく (249)。

原理に則った戦いは南北戦争を髣髴させるが、Christmas と Joanna のセックスは、戦争では不可能に終わった相互理解を求める営みのようでもあり、人種の壁を作り上げている人間の心を解き放つ儀式のようでもある。Joanna は子ども、すなわち未来、を望むがそれは叶わない。彼女の更年期とそれによる想像妊娠は、二人が共通の未来を拓くことはないこと——南部と北部の関係が不毛 (barren) であること——を示唆している。やがて二人は行き場を失う。そして彼らの意識は過去へと向かうのである。Joanna は Christmas に黒人として生きるよう諭し始め、これに対し Christmas は Joanna の顔が反対側を向くほど深く首を切り、家に火をつける。二人の行動は、北部から南部への価値観の強制とそれに反発する南部を暗喩しているかのようでもある。

Light in August や “Rose for Emily” における性的な描写や淫靡な情景や腐敗のイメージは、南部人の北部に対する感情が理性では説明できない深いレベルにあ

るという Faulkner の理解によるものだろう。Faulkner は、自分も含めた南部白人男性が抱く北部への深く屈折した感情を、小説を通してさまざまな形で反芻している。

一方で、Faulkner は小説において北部人の南部観を画一的にも表象している。たとえば *Absalom, Absalom!* の Shreve は Quentin とともに Sutpen 一族に起こった出来事を再構築していくが、彼にとってはそれは所詮他人事にすぎない——「南部はおもしろいじゃないか。演劇よりいいじゃないか。『ベン・ハー』よりいいじゃないか」(*Absalom*, 176)。自ら作る南部の物語の主人公 Sutpen を「悪魔」と呼び、南軍を「反乱軍」(144) として語る Shreve は、最終的には、「一人の Sutpen を片づけるのに、二人のくろんぼが必要だったってわけだ」と物語を単純化して総括し、「これで台帳がすべてきれいになった。ページを全部破いて燃やせるね」と簡単に片をつけている (302)。

「北部人やりべラルは南部のことを知らない。遠くにいてはわからない」(*ESPL*, 90)⁹。「合衆国のほかの地域の人たちは……南部のこの状態をまったく簡単に単純なものだと思っている。だから、法を盾にした国民の多数派の単純な意志によって、明日にでも変われると思っているのだ」(*ESPL*, 88)¹⁰。このような Faulkner の北部批判は、あたかも *Absalom, Absalom!* の Shreve を念頭に置いて行われているかのようである。

もっとも、Faulkner が Shreve に南部の物語を語るのを許しているのは、彼が合衆国の北部人でなく、カナダ人だからかもしれない。*Light in August* に登場するカーペットバガーの Burden 一家に対する Faulkner の扱いは辛辣である。黒人の投票権を主張したために南部人に殺された Calvin Burden は、次のような発言をする差別主義者として描かれている：「貧弱な体をした色の黒いやつらときたら、なんていまましいんだ。貧弱な体は神の怒りに押しつぶされているからだ。色が黒いのは、やつらの血と肉が、囚われた卑屈な精神という罪で汚れているからだ」(247)。

Faulkner の描く北部人は人道主義者でもなければ差別撤廃主義者でもない。南部人と変わらぬ人種差別意識を持ちながら、南部のあり方に干渉しようとする人々である。こうした人々への反発が南部でもっとも強まったのは南北戦争とそれに続く再建期だが、1940年代後半から50年代という時代は、多くの南部白人

にとって、この忌まわしい時代が蘇ったかのようであった。1948年に連邦政府によって人種差別撤廃の圧力が加えられる様子について、Charles S. Reidは、「あたかもカーペットバガーたちが、馬に乗って、もしくは裁判長の席に座って、再来したかのようだ」と書いている (Daniel, 26)。¹¹

再建期以降、南部諸州の人種隔離の法律は、奴隷制に相当する、南部人にとっての新たな砦だった。したがって、その撤廃を強要されることになれば、南北戦争時の南部人が奴隷制に対して行ったように、1950年代の南部白人も命を賭してこれを守らねばならなかった。それを踏まえれば、小説の中で南部人の原点をしばしば南北戦争の敗北に据えてきたFaulknerが、この問題を「単なる法律の問題ではない。道徳すら超越した問題だ。100年前の1860年からずっとそうだ」ととらえているのは、もっともであろう (ESPL, 89)。¹² Faulknerは、南部は「法の強要や経済的な脅迫によって人種問題の状況を変えるくらいなら、たとえ破滅へと至っても、どんな致命的なことでもすると、南北戦争で北部に示すべきだったのに、それができなかった」と、今度こそそんな失敗^まはしないと受け取れるような発言をしている (ESPL, 89)。¹³

南部人の原点が南北戦争の敗北にあるとすれば、南部を内側から描く作家Faulknerの文学がそれに影響されていないはずはないだろう。¹⁴ Faulknerは、1955年に日本人の若者に向けて、南北戦争と第二次世界大戦でそれぞれ敗北した南部と日本を並列させ、「わたしの『国』である南部がそうであったように、日本も、不幸や絶望から作家を生み出し、その作家たちは日本の真実ではなく普遍的な真実を語るだろう」と述べている (ESPL, 83-84)。¹⁵

50年代のFaulknerの穏健主義を批判した一人にLillian Smith (1897-1966)がいるが、同じ年に生まれたこの二人の南部作家を並べてみると、いかに彼らの書く小説と思考とが密接に結びついているかが明らかである。Smithは、「新しい南部を創造しなければならない、行動を起こさなければならない」という言葉通り、社会変革の意識を原動力に小説を書いている (Daniel, 173)。小説を使って、彼女が問題視するさまざまな現実を指摘し、彼女の描く理想像を展開している。一方、Faulknerにとって書くこととは、「自分の故郷の郵便切手のように小さな土地」を「現実から物語へと昇華させる」ことである (LIG, 255)。Faulknerは小説を書くことで二重に南部の現実を生きたともいえる。

ただし Faulkner も、公民権法案や反リンチ法案が政治課題として取り上げられ始めた1948年、小説によって人種問題の解決方法を模索している。*Intruder in the Dust* がそれである。この小説で、白人殺害の無実の罪を着せられた黒人 Lucas を救うのは、16歳の Chick Mallison である。そして、Chick に力を貸すのは黒人少年と白人女性である。Lucas の弁護を引き受けた Chick の伯父の Gavin Stevens は、典型的な南部白人リベラルといった人物で、人種を通してしか Lucas を見られず、Lucas を真犯人であるとすら思っている。この小説には、南部白人主義的な思考では、人種問題を解決できないばかりか、真実さえも見極めることができないという Faulkner の考えが集約されている。Faulkner は、問題の解決を次の世代に委ね、黒人や女性に象徴される南部白人男性的な価値観を持たない人々とともにそれを行わせているのである。

Intruder には、Faulkner の人種問題に対する姿勢が端的に表れている。すなわち、人種を通してではなく個人として黒人を見て、彼らに公平な権利を与えること、問題の解決は南部人自らの手で、長期的な視点で漸進的に行うこと、である。漸進的な解決——若者への期待——はとくに強く、Faulkner は偏見のない子どもたちの時代になれば人種問題はなくなるだろうと頻繁に述べている。¹⁶ その意味で *Intruder* は人種問題解決のモデルケースとも言え、このモデルケースを基準にして、Faulkner は激動の1950年代に向かっていたのである。

Ⅲ.

しかし、1950年代の南部は Faulkner が描いてきた南部よりもはるかに根深い人種問題を抱える場所だった。Willie McGee の裁判はそれを Faulkner に思い知らせただろう。McGee は、白人女性をレイプしたとして1945年に死刑判決を受け、1951年5月に処刑された黒人男性である。Faulkner は処刑のひと月ほど前に、「強制や暴力をともなわなかったのであれば、そしてともなったと証明されないのだから、死刑には相当しない」と述べている (*ESPL*, 211)。

白人女性による告発のみを根拠とし、真実が解明されることなく黒人男性が処刑される点で、McGee の事件は、Faulkner の短編 “Dry September” (1931年)

に重なり合う。ただし現実起きた事件は、20年前にFaulknerが創造したよりはるかに閉塞感を感じさせるものだった。“Dry September”では、告発者の白人女性の奇矯な行動や、私刑^{リンチ}の主導者の不安定な精神状態が語られており、一部の常軌を逸した人間によって引き起こされる点が強調されている。リンチに反対する理髪師の「まずは真実を明らかにしようじゃないか。……。保安官を呼んで、きちんとやろうじゃないか」ということばは、法に訴えれば真実が解明され、公正な裁判が行われるという前提が社会に共有されていることを示している（172）。Faulknerの南部では、法が個人を守っているのである。ところが、現実起きたのは、たったの2分半で、あきらかに不適当な死刑判決が合法的に下されるということだった。法は真実を解明するどころか、不当な罪を着せるために使われたのである。

Faulknerの小説の舞台は故郷の土地をモデルとしており、現実の南部を写し取ったもののはずであった。現実のMississippiとFaulknerのヨクナパトーフアとはパラレルであり、だから、現実で起こっていることはヨクナパトーフアでも起こり得るはずであり、ヨクナパトーフアで起こっていることは現実のミシシッピでも同じように起こり得るはずであった。ところが現実には、救いを求める手段すらない殺伐とした場所になっていた。

そして1950年代という時代はさらに速度を上げて進んでいく。1954年にはブラウン判決が連邦最高裁判所によって下され、1955年には「モンゴメリー・バス・ボイコット」運動が開始されるなど、公民権運動が本格化していった。同時に、それに反発する白人至上主義者たちの暴力も激しさを増した。

Faulknerの生活も変化していた。Faulknerは1950年に前年度のノーベル賞を受賞したことで、世界のさまざまな地域に招かれ、アメリカを代表する作家としての発言を求められるようになった。1953年11月には、大作*Fable*も完成し、小説から離れることも多くなっていた。Faulknerは人種問題に関して発言を続けていたが、彼の中道主義は、人種隔離を存続しようとする南部白人たちのみならず、早急な人種差別の撤廃を求める団体や白人リベラルからも批判の対象となった。Faulknerの孤独は愛するふるさと南部への幻滅を深めていく。

スウェーデンはわたしにノーベル賞を与えた。フランスはわたしにレジオン・

ドヌール勲章を与えた。それなのに、わたしのふるさとときたら、わたしが抗議をした、嘆願をした、といっちはプライバシーを侵害するだけだ。これでは、世界中から嫌われて当然だ… (SLWF, 354)。¹⁷

わたしは自分がやれることをやっているのだ。いつかふるさとの州を離れなければならないときが来るかもしれない。ユダヤ人がヒトラーの時代にドイツから逃れなければならなかったように。(SLWF, 382)。¹⁸

アメリカを代表する作家として世界を旅し、世界に向かって発言するという経験により、Faulknerは、南部を世界という場所から眺める視点を得た。そして、南部作家Faulknerはアメリカの作家Faulknerと見事に重なりもした。Noel Polkが指摘するように、Faulknerは「現代の世界が、個人から個人的な活動を奪うのではないかと心配をして」いたからだ (227)。Faulknerは自分が「忌み嫌う、集合体としてのヒューマニティが、第二次世界大戦後の世界では共産主義やアメリカ政府の福祉政策といった形で政治的に大手を振るって」おり、それにより「個として独立した状態であることやその権利が個人から奪われている」と考えていた (227)。自由主義のリーダーたるアメリカというとらえ方を好むFaulknerにとって、その代表として発言することは自らの思想と何ら矛盾するところがないのであったのである。Faulknerの「アメリカンドリームとは『個人の自由』と同義であ」と述べるCharles Reagan Wilsonは、Faulknerは「自由だけでなく平等の概念もアメリカンドリームに加えている」と興味深い指摘を行っている (90)。

「アメリカ人として自由を守ろう、人種問題で対立している場合ではない」というFaulknerの主張は、しかし一方で、彼を白人至上主義的な人種観へと導いてもいく。1955年11月の南部歴史協会における演説とHarper'sのエッセイ「恐怖について」(1956年6月号)を例に取ってみよう。この2つは共通する文言が多いが、Faulknerは、肌の色の違いではなく、「まだ自由である者たちとして、まだ自由であるすべての人々と同盟を組まなくてはならない」(ESPL 147, 102)と述べた後、選択肢を持ち出す形で自由を取るよう訴えている。南部人向けの南部歴史協会での演説では、「問題はもはや黒人に対する白人ということではないのです。もはや白人の血が純血を保てるかどうかではなく、白人が自由でいられるかどうか

かなのです」(ESPL 151)と述べ、全米に読者を持つ*Harper's*のエッセイにおいては、「選択肢は、肌の色でも人種でも宗教でもない。東側につくか西側につくかでもない。奴隷でいるのか自由であるのか、それだけなのだ」(ESPL, 105)と書いている。

さらにFaulknerは、南部歴史協会の会員に向かって、われわれ(we)を西洋の白人男性(the western white man)と規定し、それがアメリカであると定義する。そして、その「われわれアメリカ(we, America)は、共産主義と画一主義に反対する最強の勢力」であるから、個人の自由について白人以外の民族に「教えなければならない」と述べる(ESPL, 148)。そして、これが「簡単に実現可能なのは、われわれの非白人マイノリティがすでにわれわれの側にいる」ことから明らかであると続ける(ESPL, 149)。Faulknerによれば、この非白人マイノリティすなわちアメリカの黒人は「300年前はアフリカの熱帯雨林で象やカバの腐肉を食べて」、「大きな水辺に居住していたのに、航海については一度も考えたことがなく」、「飢餓や疫病や外敵から逃れるために毎年村中で移動しているのに、一度も車輪について考えたことがなかった」のにもかかわらず、「アメリカでの300年間で」錚々たる人物を輩出するようになった(ESPL, 149)。¹⁹ 全国誌では、さすがに、南部人向けの演説よりトーンを下げた言い換えがされているが、それでも基本的な姿勢は変わらない。要するに、アメリカにいる黒人は無知なる未開人であったが、アメリカという国、そしてその自由主義と民主主義によって「文明化」された結果、目覚ましい進歩を見せており、だから、アメリカの自由主義はすばらしく、この思想を世界に広めなければならないという主旨である。

この論において、アメリカの黒人はアメリカという国の内なる他者になっている。自由主義の主体が白人に規定されたため、黒人はアメリカからはじき出されてしまったのである。1950年代の世界は自由主義対全体主義・共産主義という冷戦の時代であり、二項対立的な思考が幅を利かせていた。そうした状況の中で、二項対立を使わずに自由主義について考え、語ることは難しかっただろう。ましてやFaulknerは、自由主義のリーダーであるアメリカを代表する人物として考え、語っていたのだから。それでも、南部における内なる他者という考え方は、南北戦争時代のそしてジム・クロウ時代の南部白人の黒人のとらえ方と重なり合う。²⁰ Faulknerの人種問題に関する発言でもっとも評判の悪い「もし戦わなければなら

ないときが来たら、わたしはミシシッピのために合衆国を相手に戦うだろう。それが通りに出て黒人を撃つようなことだとしても」という発言も、黒人を内なる他者ととらえたために起こったと考えることができる (*LIG*, 258-59)。²¹

多くの人を驚愕させたこの発言は、Faulkner が本当に穏健派なのかという疑惑どころか、人種問題に対する彼の姿勢そのものに疑問符を投げかけることになった。このときも Faulkner は問題を二項対立で考えている。人種の融合の象徴である「合衆国」と隔離の象徴である「ミシシッピ」の対立の構図は、南北戦争時代の対立の図式でもある。こうした二項対立により、1950年代のミシシッピの人種は奴隷制時代のものに、すなわち所有者と所有物のそれに重なってしまった。ミシシッピの白人である Faulkner は、酔いも手伝って、所有者として所有物たる黒人の命を自由にできるという失言に至ったのだろう。²² ここでの Faulkner はもはや個人を見ていない。彼が見ているのは人種という集団である。Faulkner は、人間を大文字の黒人や大文字の白人といったグループに閉じ込めてしまったのである。

Faulkner の姿勢は、その後、ますます頑なになっていく。1957年9月に発表した Little Rock の事件に関する書簡でも、これまで同様、世界を自由主義対全体主義の二項対立的な枠組みでとらえ、前者の代表であるアメリカの旗の下で黒人と白人との結集を呼び掛けているが、ここで彼が前提としているのは「黒人と白人はうまくやっていけないし、これからもおそらくできないという事実」である (*ESPL*, 230)。²³

最終的に Faulkner が至ったのは、1958年2月にヴァージニア大学で行ったスピーチ “A Word to Virginians” のような地点だった。Faulkner は、「黒人は黒人らしさを捨て、すぐれた白人のようにならなければ自由と平等を手に入れることはできず、黒人をそう躰けるのはわれわれ南部の白人です」と主張し、「それを始める場所は、南部の土地すべての母であるヴァージニアです。……。南部のそのほかの地域は、子どもが母親を見て、どこへどう行けばよいのか指示を仰ぐように、ヴァージニアを見つめています」と訴えている (*ESPL*, 158)。²⁴ 時代を1860年以前に完全に逆戻りさせてしまったようである。

Faulkner の考え方が白人至上主義的なものになっていく様子は人種の混淆に対する考え方の変化にもあらわれている。かつて Faulkner は人種の混淆を人種問題

の行き着く最終地点の一つと考えていた。*Absalom, Absalom!*ではShreveに「Jim Bondのような人たちがやがて西半球を征服するのだろうか」と遠い未来を想像させているし(302)、「Delta Autumn」ではIssac McCaslinに、黒人の血を引く女性に向かって「北部へ行くんだ。結婚しなさい、同じ人種の男とな。それが唯一の救済策だ——まだしばらくはそうなのだ。待たなければならないのだ」と言わせている(346)。人種の混淆は、南部社会では社会の根幹を揺るがすような事柄であり、その恐怖によって南部社会の規範が支えられていたといっても過言ではない。異人種同士の結婚を、小説のなかであれ、遠い未来においてであれ、将来の可能性の一つとして視野に入れていたということは、Faulknerがこの禁忌をいかに客観視していたかの証しだろう。しかし、1950年代の半ばを過ぎると、Faulknerの考え方は変化している。

わたしは、この国の黒人種は2, 3百年の間に消えてなくなっている。たんに白人のほうが数が多いというだけの理由で、黒人は白人に吸収されていくだろう。(LIG, 182-83)²⁵

長い目で見て、黒人種は人種間結婚により300年間で消えてなくなるだろう。これはどんな地域においてもどんな少数民族にも起こっていることであり、それがここでも起こるだろう。(LIG, 258)²⁶

ここでもFaulknerは、彼自身が忌み嫌う、人間の集団化を行っている。Faulknerが小説を書くことで、個人の個性を尊重することを、そしてそれを可能にするために、すべての人間に自由と平等な機会を与えるべきであるという考え方を育んでいたとしたら、1950年代の彼が行っていたのは、それとは正反対の、集合体としての人間という見方である。アメリカを代表する人物としての発言は、Faulknerに、南部人としてではなく、アメリカ人として考えさせることになった。大きな枠組みから問題をとらえることは、しかし同時に、問題を一般化し、単純化することにもつながったのではないだろうか。スピーチや書簡という媒体を通しての思考も、問題の抽象化や概念化に拍車をかけたかもしれない。小説を書くことが現実を特殊化する(specialize)ものだとすれば、これらの行為は現実を一

般化する (generalize) ものでもあるからだ。

ノーベル賞作家として世界各地を巡る旅を経た後に、Faulkner は、早く「自分の仕事に」、「自分の想像の国に」戻りたいと述べている (SLWF, 387)。²⁷ 彼によれば、この想像の世界は、「宇宙のキーストーンのようなものであり、それがなくなったら、宇宙そのものが壊れてしまう」ようなものである (LIG, 255)。²⁸ この想像の世界はその創造主にとっても、キーストーンだったようだ。壊れないためには小説を書くことが必要だった。1950年代のFaulknerの人種問題に関する発言は、そのことをいやおうなく教えてくれる。

¹ “If I Were a Negro,” *Ebony*, September 1956. (ESPL, 107–112)

² “Interview with Russell Howe,” February 21, 1956. (LIG, 258–59)

³ 撃たれたもう一人の子どもは胸と腕を負傷し、子どもたちの父親も胸から下が麻痺し、3ヶ月後に死亡した。

⁴ *The Memphis Commercial Appeal*, March 26, 1950.

⁵ *The Memphis Commercial Appeal*, April 10, 1955.

⁶ “Address to the Graduating Class University High School,” Oxford, Mississippi, May 28, 1951.

⁷ “To Paul Pollard,” February 24, 1960.

⁸ 1955年12月4日掲載。

⁹ “A Letter to the North,” *Life*, March 5, 1956.

¹⁰ id.

¹¹ ジョージア州の実業家で短編作家の Charles S. Reid は、子供時代を再建期のサウスカロライナ州で過ごした。

¹² “A Letter to the North,” March 5, 1956.

¹³ id.

¹⁴ 後藤和彦が指摘するように、「それは戦争一般の話ではない。……。敗北であるからこそ、そこに文学への気運が醸成される」(208)。

¹⁵ “To the Youth of Japan,” 1955.

- ¹⁶ たとえば “Interview in Japan,” 1955 (*LIG*, 130-31, 183)。
- ¹⁷ October 7, 1953.
- ¹⁸ June, 12, 1955.
- ¹⁹ 錚々たる人物の例としてFaulknerは、Ralph Bunch、Washington Carver、Booker T. Washingtonらを挙げている。
- ²⁰ Charles S. Reidは1948年8月に、「黒人が南部にいるのは喜ばしいことだ。やつらにはいろいろ欠点はあるけれどね。南部にやってきた大勢のくだらないいかさま師や、北部にいてあれこれ南部に口出しをしてくる連中に比べたらずっといい」と手紙に書いている (Daniel 26-27)。
- ²¹ “Interview with Russell Howe,” February 21, 1956.
- ²² この発言が行われた経緯やその後の経緯についてはCharles Peavyを参照。Faulknerは*The Reporter* (1956年4月19日) や*Time* (1956年4月23日) で必死に弁明を行い、批評家たちもPeavyを始めとして、Faulknerの真意を探ってきたが、泥酔状態であったとはいえ発言したことは事実である。
- ²³ “To the Editor of *the New York Times*” October 13, 1957.
- ²⁴ “A Word to Virginians,” Charlottesville, February 20, 1958.
- ²⁵ “Meeting at Tokyo American Cultural Center,” August, 1955.
- ²⁶ “Interview with Russell Howe,” February 21, 1956.
- ²⁷ October 20, 1955.
- ²⁸ “Interview with Jean Stein Vanden Heuvel,” 1956.

Works Cited:

- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. One-Volume Ed. 1974. Jackson: UP of Mississippi, 2005.
- Daniel, Pete. *Lost Revolutions: The South in the 1950s*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2000.
- Faulkner, William. “A Rose for Emily,” *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage, 1995. 119-130.
- . *Absalom, Absalom!* 1936. New York: Vintage, 1990.

- . "Delta Autumn." *Go Down, Moses*. 1940. New York: Vintage, 1990. 317-48.
- . "Dry September." *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage, 1995. 169-183.
- . *Essays, Speeches & Public Letters*. 1965. Ed. James B. Meriwether. New York: The Modern Library, 2004.
- . *Intruder in the Dust*. 1948. New York: Vintage, 1991.
- . *Light in August*. 1932. New York: Vintage, 1990.
- . *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962*. Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random House, 1968.
- . "That Evening Sun," *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage, 1995. 289-309.
- . *Selected Letters of William Faulkner*. Ed. Joseph Blotner. New York: Random House, 1978.
- Peavy, Charles D. *Go Slow Now: Faulkner and the Race Question*. Eugene, Oregon: U of Oregon, 1971.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1996.
- Sensibar, Judith L. *Faulkner and Love: The Women Who Shaped His Art*. New Haven: Yale UP, 2009.
- Smith, Lillian. *Now is the Time*. 1955. Jackson: UP of Mississippi, 2004.
- . *Strange Fruit*. 1944. San Diego: Harcourt Bruce & Co., 1992.
- Wilson, Charles Reagan. *Flashes of a Southern Spirit: Meanings of the Spirit in the U.S. South*. Athens, Georgia: U of Georgia P, 2011.
- 後藤和彦 『敗北と文学——アメリカ南部と近代日本』 松柏社、2005